



見沼・風の学校 プロジェクト2006

サバイバルキャンプ2006

小川町で考える

報告：戸澤 竜也

報告：河合 研

共同/協働事業

報告：藤原 直子

耕しながら考える

報告：鈴木 拓也

「仕事」、「暮らし」、「学び」の共同体へ

報告：猪瀬 浩平

プロジェクト I

サバイバルキャンプ2006

報告 戸澤 竜也

(サバイバルキャンプ2006実行委員長)



↑ 埼玉大学インターン生と
実行委員長の2人

今年は毎日20人を超える人が参加し、サバイバルキャンプ始まって以来の太所帯となった。

今年で2年目となる埼玉大学インターン生は6人参加した。去年のインターン参加者も今年はスタッフとして参加している。

今年のテーマは去年の「業わざ」を引き継ぐ形で、「土」と定めた。

「業」を活かすための基本の土作り、業を身につける人の土台作りを、1週間を通して学ぼうという企画にした。

1週間に及ぶサバイバルキャンプは毎年のことながら「人」で成り立っている。今年もそれを強く感じた。

最初はなかなか馴染めなかったインターン生たちだが、日ごとに逞しくなっていくのが見て取れた。事故なくキャンプを終えられた理由の一つは、彼らにあ

ったと思える。

また今年は社会人スタッフ、農園のシニアのボランティアの方が居てくれたことも大きい。見沼・風の学校が設立されて5年目。第1世代のスタッフが社会人4年目などで落ち着いてきて、再び活動に参加してくれる頻度が増えてきた。彼らの存在はともありがたかった。

シニアボランティアの方は、農業の知識・技術を教えてくださり、キャンプ中には自身の経験を活かし、農園での生活には欠かせない井戸周りの整備を率先して行ってくれた。



完成した井戸周り

そして今年も地元農家の方に大変お世話になった。去年から引き続き受け入れていただいた農家の方にはお風呂を借りたり、お米を頂いたり頻繁に会っているわけではないのだが、会えば確かなつながりを感じることができた。

また新たに現役若手農家の方にもお世話になった。人脈の広さ、今抱えている課題、新たな挑戦と動き続ける人のパワーをびりびりと感じた。

サバイバルキャンプ後もちよくちよく顔を出してくださり、少しずつお互い理解を深め合っている。

「お互いに無理をしない関係」とおっしゃっていたが、そういう関係でこれからもお互いに協力し合い、いろいろ学ばせてもらいながら良い関係を築いていきたい。

今年のサバイバルキャンプはたくさん課題にぶつかった1週間であった。

それを次に活かす最善の一手に昇華できるよう、日常の作業を行いながら考えていきたい。



「見沼」とともに暮らす1週間。

最初はただの畑がある場所だった見沼という土地が、そこで生活する人たちとかかわり、見沼にかかわってきた人たちの話をきくことで、自分たちのなかで見沼が具体性をおびた「見沼」になっていく。

サバイバルキャンプは良い意味でスタートに過ぎず、サバイバルキャンプで得たものを日常のなかで深めていくことが重要なことになってくる。日常の作業をおろそかにせず、考えながら耕すことで、「見沼」、「見沼で暮らす人たち」と土でつながっていききたいと思う。

今回のインターン生は現状としてスタッフとして残っていない。

それは今回のサバキャンの課題でもあるが、逆に残ってからおうと思つて企画をしていくこととは違うなと思つた。

こちら側の水準を下げることなく、次につながる実践をしていかなければならない。今までスタッフとして残ってきた人たちは、それぞれが何かしら感じて農園にかかわってきたはずで、これからもそうでなくては続かないのではないかと思う。



サバイバルキャンプ2006その後

■小川町から考える

今年サバイバルキャンプの実行委員長として、河合と共に頑張ってきた。みなさんに迷惑をかけること

も多かったが、「土をテーマに考えながらやってきた。

週末作業にも積極的に参加する中で、自分たちがやるうらとしていたことが徐々に見えてくるのがあった。ただ考えがしつかりまとまってきたのは、サバキャンが終わった後かもしれない。正直に実行委員長はつらい部分もあったが、その責任からくる自主性、ある種の強制力のおかげで、耕しながら考えることができただと思う。

ここで12月18日に行った小川町の視察から考えたことを述べたいと思う。

まずお会いしたのは安井さんという、北原さんの知人で元県庁職員の方だ。

安井さんは環境部副部長を最後に早期退職して、農業に携わるようになって約5年くらいだ。

堆肥を作ることから始め、土作り、野菜、米、麦としっかりとした農業を営んでいた。

安井さんは金子農場の金子美登さんから有機農業のいろはを教わっている。

金子さんは小川町で30年以上、有機農業を営んでいる方で、安井さんをはじめ多くの研修生が学んでいる。現在は6人程度の研修生が住み込みで学んでいる。年齢層も広く、風の学校世代の人もいた。金子農場には、鳥、牛がいてその糞を堆肥に利用している。また生ごみや排泄物



を利用し、その分解でできるガスを抽出し料理に使用したり、お風呂を沸かしたりしている。またVDFという、てんぷら油を精製した燃料で、

軽油の汎用機を動かしていた。

昔から考えられてきた有機的な農法と今の技術をうまく組み合わせた生活をしていると思つた。

その後佐藤さんという、もとピースポーター職員の方の畑を見学させてもらった。

彼は小川町に移住してきてまだ10年くらいだ。アパートの大家さんから空いている土地を借り、梅の木が植わっている間で畑をやっている。山の傾斜地のようなどころで機械は入れないから、人力で開墾した。農業は素人なので、隣で畑をやっているおばあちゃんなどに、話を聞きながらやっているという。

安井さんも佐藤さんも小川町の土地に合った農業をやっていると感じた。ここでやっていることと同じことが見沼できるかというと、それは無理かもしれない。見沼では見沼の土地に合った農業をつきつめること大事だと思つた。

また小川町の実践を通して、手作業の大切さを改めて感じた。堆肥にしても、

手でやることで、その温度を感じ、堆肥化の状態がわかり、良い堆肥ができていく。

やはり機械を使うにしても、手作業をベースにした活動が大事なのだろうと思つた。

■もう一度手作業をベースに

「見沼田んぼ福祉農園」を創る

風の学校の発足当時も、必要なものは何でも自分たちの手で作ってきた。



5年経ち、福祉農園の環境は見違えるほどに整ってきた。その間に社会人になったスタッフも顔を出すようになり（今年のサブキャンでは本当に心強かった）、ある意味ぐるりと一周したような気がする。ただの一周でなく、らせん状に登りながら。

今農園の整備状況を見ると、サブキャンで第一農園の井戸は綺麗に建て直されたが、かまど周り、休憩小屋の屋根、プレハブの屋根、第二の井戸、第三の竹小屋（麦わらも含む）などなど老朽化し、作り直そうと話がでているものが沢山ある。

2007年はもう一度自分たちの環境を自分たちの手で創りだすことから始めなければならぬだろう。純三さん、藤枝さんがやったように、より良いものに。

■課題

技術などの面は、今挙げたものを実践するだけでも大分身につくと思う。そのなかで課題になるのは、やはりメンバー集めになるだろうか。

間口は広げながら、その中で何かを感じて残ってくれる人が良いと思う。

待つしかないのだろうか。自然と定着する人はでてくるだろうが、これは考えていかなければ課題。どうすればいいかは分からない。こちらは水準を落とさず地道に活動し続けることがまずは大事だ。



けりすることがまずは大事だ。

サブイバルキャンブ2006実行委員長

河合 研 (独立行政法人農業者大学校)

私が農園に来たのは小松光一先生の授業がきっかけでした。その時に何かを感じたから来るようになったのだと思います。その何か？

一つは人だと思います。風の学校で農作業をしているときのみんなの顔は凄く活き活きしていて、一緒にやっているこっちまでつい笑顔が出てしまうところだと思います。

もう一つは、農業という環境だと思います。

私は 岐阜県郡上市の花農家の息子として生まれ、その生活の中、育ってきた環境の中に、常に「土」というものがありました。皆さんの小さかった頃はどうかでしょうか？

農園に来て初めて土をさわったつてひとも少ないと思います。でも初めての人でも、なにかしら懐かしいって思わせてくれるとこ凄いとおもいませんか？

何をを今さらって思う人もいるかもしれませんが、俺にとつて農園は、農作業の面よりもこの人達と知り合えることが出来たつてのが大きいんだなってかんじます。

農作業的な面では、今まで机の上だけの勉強しかやってなかった事を実践する場所としてもかなり使わせて頂いていたかもしれません。そこで私が見た農園の土や作物について書きたいと思います。

1. 土に関して

見沼田んぼの中にある事から地下水が近い。そのため他の畑よりも酸素濃度がうすくなりやすく、土自体もかたくなりやすい状況にあると思います。

しかし表土(地上から20cm)はよく耕耘されており、保水生にすぐれ柔らかい良い土になっていると思います。ただ排水に関して言えば、暗渠の位置や高さから、1面の畑の中の差がありすぎていて、作物の生育状況が変わりやすい環境にあると思います。

2. 野菜に関して

1の状況をふまえて、ズバリ一番適しているのは里芋・八頭です。土深くまでは進行しない、それでいて水分を要求してくるので、主力作目を設定するのであれば、里芋系を選ぶのがらくだとおもいます。

根菜類を作る場合は、高畝&マルチをしたらどうかと思います。水が近いため下に伸びる根菜類は大きくなりくいのではとかんがえました。

根は基本的には水分を求めに地中まで深更していきます。水分がすぐそこにあることよつて、植物も安心してしまい、がんばつて根を伸ばそうと言う努力を怠つてしまうからです。

果菜類は基本的には排水の優れているところで作るのが得策だとおもいます。

植物も子孫を増やすことを確実にしていく為の構造が出来ています。植物体が元気であればあるほど実は付きにくく、少し過酷な状況にしてあげると植物も「これではダメだ！早く子孫を元氣な家に子供を」つてことになり多くの実を付けます。

果実によつては水分がありすぎると、水っぽくなつ

て美味しくない物があるのでそれも注意しておかなければいけないとおもいます。

日照や温度によっても変わってくるのですが、自分の成長(栄養生長から子孫を残すための生長(生殖生長)に切り替わりを判断すると言いうことも栽培においては必要になってきます。

野菜の剪定(ピンチ)に関して、果菜類で特にします。どの野菜かでもピンチの仕方が変わってくるのですが、なぜやった方がいいのかというと、一つは枝を伸ばすことによって植物体の使う栄養が全部体を作る方になってしまふ。それにより本体自体は体も大きくなり見栄えも良いし花の数も多くなるが、実が付きにくく、味も品質も落ちてしまいます。

主枝に近いところで果実を取るようにすることで、効率よく実をならすことが出来ると思いますが(作目によってことなりますが)。

・栄養面

昨年の総括合宿で色々と言いましたが、実践出来ておらず、申し訳ありません。ただ、見沼は地下水の影響もあり、塩基類(栄養分)が流れやすく保有しにくくなつて居るんじゃないかとも思います。

来春を目指して使わない所は堆肥をドツカとまいて耕耘して1ヶ月ぐらい立つてからの作付けをしてみたらとおもいます。

後は緑肥の投与。麦わらも窒素分の保有が高く、鋤込むことによって地力を上げていく方法があります。あとは豆系の根粒菌は周りにある窒素分を固定する働きがあります。

・ハーブ園について

私がここに来て最後何を残すかってことで、戸澤君やみんなと協力して、新しくハーブ園を作ることが出

来ました。ありがとうございます。

元々ハーブは雑草と一緒にどここの地域にも臨機応変に育ってくれる育てやすい作物です。しかし、ハーブは地中海性気候原産の物が多く見沼という土地では水分が多く香りの少ないハーブしか出来ていませんでした。そこでレイズドベット形式にすることによって、排水性を良くし、障害者でも使いやすい高さの物を作ることにしました。

いま植わっているものはほとんどが宿根草なので、一度切り戻しさえしつかりしていけば冬越しも、来年も育つと思います。

1年草のも特にバジルの販売の面でも主力になって行くと思うので、2週間ぐらいの感覚をあげて、2度か3度ぐらい種まきをしてはとおもいます。

農園では質問する事より質問される事が多く、そのたびに分からないことが無いようにと、調べるきっかけを沢山いただきました。

質問のたびにまた一つまた一つと知識の面でも、実践の面でも大きかったと思います。

最後に、農園ではかなり好きなようにいろいろやらせて頂き本当にありがとうございました。

これからもなんだかの形で、皆さんと農園とかかわって行けたらとおもっています。

これからも笑顔あふれる農園であるようにこれからも協力していきたいとおもいます。

農作業をすると手が汚れる、

手が荒れる

でもそんな手を見て

かっこいいって言うてくれる人がいる

農作業をするとなんだか考えがまとまる。

昨日まであんなに悩んでいたのに

土つてすげーなあ

共に農作業をする仲間がいる、

共に将来のことを語れるやつがいる

共に助け合える友がいる

共に 友に

この先どんな事があっても

友がいるつてすげー力になると思う

農は未知数の力をもっている

そんな農 農業を

これからも大切にしたい



【共同/協働事業】

報告：藤原 直子

事業を進めるに当たって必要な動き・認識とは？

今年度の成果・反省点を活かし、
次年度の課題・展望を共有する



1 共同/協働事業が目指したもの

- ① 互いの団体の連携を強める。
- ② ブランド作りを通して金銭的にも力をつける

2 具体的動き

① 話し合い

互いの団体の歴史・活動内容・現状(制度等含む)・目指してきたもの、福祉農園内の団体で共同して作業する意味、具体的動きの確認、それぞれの持つ感情も含め、何度も話し合うことを通して認識を共有したことが重要だったと思う。

② 作業日・作業場所・作物

作業日：基本的に毎週火曜日

(その他週3回の有償ボランティア)

作業場所：農園・デイケアわくわく作業所

作物：里芋・ズイキ・乾燥ハーブ・ポップコーン

③ 販売

駅からハイキング販売ブース(南区フェスタ)埼玉大学
学園祭(県庁内アンテナショップ)かつぼボランティア
学芸 Cafe 等

3 得られたもの

① 収入(金銭的結果)

87,167円(うち前年度繰越金32,000円) 12月20日現在

② 在り方

a) わくわく風の学校の関係の深まり

交流の深まりにより、福祉農園全体の維持を視野に入れたうえで自分の位置・関わり方をそれぞれが考える契機となった(?)。以前より問題意識等もより身近に共有できるようになった。

b) 風の学校スタッフ作業日の多様化

週末のみでは参加不可能な風の学校スタッフが平日に

参加し易くなった。

c) 雨天時の作業の広がり

d) 今年度の連携により、次年度以降の基本的な動き方が把握できた



4 見えてきたもの(課題・展望)

① 対話

今後にも更に濃密な対話が必要。理解し合えた数だけ協力が生まれると思う。

↓次年度中核を担う風の学校スタッフにもぺんぎん村・わくわく側の現状や思いを直に聞ける場があるといい。

② ハーブに関して、

日常的に「育てる」段階の関わりも増やす必要がある。いいものを育てられなければ結局生産に繋がらない。

また、栽培・収穫(＋加工)に関して特に難しいことはない。↓藤枝さんに協力して頂き、その中で他の作業の業・技も学ぶ。

③ 風の学校スタッフの平日作業参加の難しさ

今年度少しづつ広がりが見せたものの、次年度中核を担っていく風の学校スタッフの参加は少なかった。

次年度、平日にどのように参加できるか？

休日作業にどのように組み込めるか？

④生産品を多様にする

里芋・ずいき・ハーブ・切干大根・うこん・ポップコーン・干し芋・乾燥（ぼう）等

↓その中で、統一した作業の流れ（共同事業としての年間計画）を出す必要あり。

⑤わくわく作業所2階を乾燥・加工スペースにする
↓しかし、これでは結局ダイケアわくわくの「中」に在るということ。

将来的に（具体的にいつまで？）、違うスペースを探すべきではないか？

⑥専従スタッフの獲得を視野に入れる

結局、関わる「人」が一番重要。

専従スタッフをおける体制作りを視野に入れる。

↓会計・作業場所をどの程度一本化できるか？

⑦イベント販売以外に常時置いてもらえる店舗・使用してもらええる料理店等を探す

↑現在の生産数では難しいが…。

⑧共同事業の位置付け

連携・協力を強めていく形をとるか、重なりつつも自立した存在として進むか？

将来的にはNPO化も検討すべきではないか？という声も。

5. 最後に

今後、共同事業を進めるに当たって、それぞれの人に必要な動き・認識とは？

それを、皆で共有したうえで、それぞれが今よりもう少し自分の関わり得る問題として考えることが必要だと思ふ。



鈴木 拓也 （立教大学）

3年と数ヶ月という短くも濃密な時間。振り返るだけでいろいろな思いがめぐった。

最終的に思ったのは「耕しながら、考える」に尽きるということだ。

そこから「耕しながら、考える」この言葉を「耕作」（こうこう）という言葉にしてみるのはどうだろうかと思うに至った。

成果

● 「耕作する」ことを実行してきたこと

風の学校の活動のこれまでの成果は「耕作する」ことを実行してきたことにあると思う。

特に、それ以前にももちろんあったことではあるが、2004年秋から開始した農的若衆宿では方向性を定め、作業と勉強会を通して具体的に耕作してきた。

その流れの中でおこなわれたサバイバルキャンプ2005,2006ではそれを一週間の中で範囲を広げ、実行してきた。

「耕作」の「考える」方の見沼学のための題材がこのサバイバルキャンプの中から生まれてきたこともひとつの例だろう。

● 関係の広がり、深まり

またこうした耕作から生まれた関係も大きな成果のひとつだ。

地元農家の方々には、サバイバルキャンプ中にお風呂や洗濯機をお借したこと、ゲストとしてお話を聞かせてくださったこと、自分の畑で作業をさせていただ

く、など多大な助力を頂いている。日常的にもイベントのときや週末にいらっしやったださるが増えた。それだけでなく、他団体の方々との関係も若衆宿を入り口のひととして関係をつくることができている。また、埼玉大学からゼミや授業、インターンを受け入れることで、地元大学とのつながりも出来てきている。

●取りまとめ

ただ、こういったイベントの成果の元には日常作業で耕考していることが必須条件だ。今年代表の提案から生まれた「取りまとめ」は日常作業を常に振り返り、考え直すという「耕考」そのものであるように思う。それを代表に導かれる形で行ってきたことは大きな成果だと考える。

今後の課題

●より耕し、より考えるために

これまでは成果を書き綴ってきたが、ここからはより「耕考」を深めていくためにどうして行くべきかを考える。ここからは具体的な課題をならべてみたい。

① 社会人スタッフの関わり方について

今年度卒業生が多く出ること、社会人スタッフの数が増える。日常作業にはあまり参加できなかったとしても、それ以外のそれぞれが社会人として今やっていることや生活と風の学校との関わり方を照らし合わせて考えることで、風の学校の幅を広げることにもつながる。

② 風の学校と外との関係

サバイバルキャンプなどを通し、様々な方との関係

が出来上がってきている。その対応に甘さが見られたのが今年のサバイバルキャンプに出てしまった。今後も関係を続けていく上で、「学生だから」という言葉に甘えない（もちろん今も甘えているつもりはないが）対応の仕方をしていく必要がある。

協議会団体との提携関係や、農園の外の方々との関係が広がり、深まる中でそれを良好に進めていくためにも対応の仕方を磨いていくことが大切である。



「仕事」、「暮らし」、「学び」の共同体へ

見沼・風の学校 事務局長 猪瀬 浩平

何から話そうか、迷う。

5年間の実感として最初に浮かぶのは、「よくまあ、こんなことになったものだ」ということだ。

ちょうど、農園ボランティアとして農園に関わり出した小笠原さん、高校時代からの友人の梶間君を誘って農園に集まり、「農園の中で若者」の動きをつくり出すと話したのが5年前の大晦日。あの頃はむしろ「子どもたちと農園活動をする」ということに主眼が置かれていて、毎週農作業をしに人が来るとか、農業のわざや知恵を学ぶことになるとか、そういったことはあまり想像できなかった。

それが今は、平日、農園の障害者スタッフやシニアボランティアの方々との耕作を行い、今日、学生、7、社会人、そして子どもも含んだ人々と農作業を行っている。自分にとって、気にかかって仕方ない、そして死ぬまで付き合おうであろう人たちの幅は、家族や友人というのを超えて、恐ろしく広がっている。

風の学校が生まれてからの、目まぐるしい二期一会

色々な事件が起こる中で自分の問題意識が広がり、そのことに一つ一つ対応していく中で、考え方だけではなく、身の処し方すらも変わっていった。

たとえば、自然の猛威。あるいは、ずっとそこにあると思っていた桜の木が倒れたとき、目の前の加田屋川が氾濫したとき、強風に飛ばされてテントのポールが折れてしまったとき。

たとえば、業の迫力。初めて自分のうえつけたジャガイモが芽を出したとき。大井さんに教わりながら井

戸の屋根をかけたとき、卯吉さんのズイキの皮むきの鮮やかにふれたとき。

様々な個性をもった人たちと出会う中で、自分の力の及ばない世界を知り、少しずつ彼らの感覚を共有することができるようになった。

一つ一つの出会い。挙げ出したら切がないのだけれども、初めて幸宏の家のドアをあけたとき。いかにも今風の格好のスツシーに話しかけたとき、ジーパン＋トレーナ姿の陽介が東浦和駅に現れたとき。バンコクの高級ホテルのレストランで姉妹都市出身色黒屈強な馬場相任と出会った時。

自分の家族の昔の姿を彷彿とさせる高澤一家が登場した時。父母に伴われた常義が不安げな顔で農園に現れたとき。外国人留学生のようなリカルドが農園に見学に訪れたとき。仲本公民館でヤスに「自分を変えたいんで」と鋭い目つきで言われたとき。

その不安と期待の入り混じった、それぞれの圧倒的な出会いが今の自分にとっての原体験である。

いいこともあれば、悪いこともある

ふって沸いたように起こった2003年12月の廃園騒動。野良猫、野良犬問題。度々の火難事件。それでも、そのつど人の力で乗り越えてきた。

「来るものは拒まず、去るものは追わず」といつも思ってきた。様々な軋轢があつたし、運営側としての対応が不十分で問題を起したことも一度や二度ではない。その中で農園を去る人もいたし、去ってまた戻ってくる人もいた。それ以上に新しく農園を訪れる人がいて、仲間になる人がいて、今がある。

見沼・風の学校も6年目を迎えるようとする

この5年間、「学生」が勢いにのって様々な活動に挑戦し、失敗を繰り返しながら進んでいった。

次第に自分たちの暮らしの課題を共有しながら、個々バラバラに生きることを常とする時代の趨勢に抗しようとする、新しい絆が生まれようとしている。

創設時に20代前半だった中心メンバーが5年間たち、20代後半となる中で生まれてきた、成熟とも連動している。中心スタッフに「考えながら、耕す姿勢」が生まれている。

焚き火を囲みながらの語りも、地元の民俗の話から、ハーブの生産・加工・販売、そして平日活動している人たちを取り巻く状況まで、世代を超えた語りになっている。

この5年間の成果は、見沼が耕しながら、いつのまにか自分自身もその情景の一部になっている、そして見沼が僕らの「生きる場所」に変わったことにある。

見沼とそこを取り巻く関係の中で、上から与えられたルールや知識ではない、自分たちにとってのルールをつくること。

代表の善意に頼るのではなく、彼が担っているコストとリスクを具体的に共有すること。

課題に目を背けるのではなく、その背景にある問題を把握し、その解決の道を模索すること。

そして、南部領辻にあった「自治」を、考え、耕しながら、今の農園にふたたび生み出す。

それこそが、今、風の学校が目指すべき「仕事」、「暮らし」、「学び」の共同体である。

(2006年12月29日)

